



毎年8月の初めに宍道湖岸で開催される松江水郷祭は県内最大の花火大会で、今年も大勢の人手で賑わいました。実は妻の実家が宍道湖の近くにあるので、毎年お邪魔をして夕食を戴いてから花火見物に出るのが恒例になっています。

拙宅から妻の実家までは少し離れています。車で行くといくぶんが飲めない上に帰りの渋滞がハンパなのでバスで出かけて徒歩で帰ることにしています。今年も例年通り花火見物を終えての帰り道のこと、閉店した書店の前にゴキブリのような黒い物体がひっくり返つてうごめいているのを発見しました。近寄ってみると小さなクワガタムシの雌です。こんなところにいたら踏み潰されるがオチだろうと思ひ、たまたま持っていたレジ袋に入れて保護することにしました。

それから暫く歩き続け自宅近くのコインランドリーの前を通りかかると、ドアガラスの前に今度は大きな黒光りした物体がひっくり返つて暴れもがいているのです。紛う方なきカブトムシの雄です。昆虫大好き爺ちゃん坊やの私は思わず『ラッキー！』と声をあげて捕まえるとレジ袋に入れて連れて帰りました。

クワガタとカブト、最近はずつかり見かけること

が無かったので久々の大漁です。特にカブトムシの雄を手にするのは何十年ぶりのことでしょうか。なかなか立派な体格で、その姿はカッチョコブー！としか言いようがありません。

カブトムシは取りあえずお菓子の空き箱に入れましたが興奮冷めやらぬ様子で暴れています。この暴君とお嬢さんを一緒にするわけにもいかないので、クワガタは別の小さな箱に入れておいて今夜は遅いのでおやすみなさいです。

さて翌朝、使い古しの金魚水槽に向いの林から拾ってきた枯葉やら枝やらを入れて二匹を放ちました。さて問題は餌です。今では昆虫ゼリーという専用の餌が売られています。私が子どもの頃はそんな便利でおしゃれなもの無く、砂糖水に日本酒を混ぜた液体を脱脂綿に含ませてやるのが定番でした。きつと当時の昆虫図鑑にでも載っていたのでしょうか。

けど今ネットで調べると砂糖水は栄養価が低く水分が多いのでお腹を壊して？短命に終るといふ説を目にするのですが、私はその昔砂糖水だけでクワガタを越冬させたことがあるので根拠のある話では無さそうです。

何だか少年時代に戻ったような懐かしい夏休み気分を味わうことができました。

老い老いに 木幡智恵美

1

夕焼け通信という週刊通信が始まったのは一九九三年四月。その頃の私はまだ三代だった。子育て真っ最中で、長女が五年生になり、長男が小学校に入学したばかり、二男は保育園の年少だった。毎日追いついてられるような生活で、朝洗濯物を干し終えようと、子どもたちにご飯を食べさせ、長女と長男の小学校への送り出しは義母に任せて二男を保育所に預けてから職場に向かう。仕事を終えたと二男を保育所に迎へに行き、帰るとすぐに夕ご飯作りにかかる。皆に食べさせた後は、片付けをし、風呂に入れて寝かせる。仕事の面では特別支援教育への道へと踏み出し、内地留学を終えて新しい学校に赴任して二年目に入った年だ。

今、長女は仕事をしながら、四年生の長男、二年生の長女、年中の二男を育てている。土曜日に子守に行くと、子どもたちにご飯を食べさせながら、夕ご飯の下ごしらえをしたり、保育園のノートに書き込みをしたり、ひと時としてじつとしていない。動きながら、「ほら、早く食べなさい」「ゴロゴロしないの」「歯磨きだよ」と、口も盛んに動いている。いやあ、大変だなと思ひながら、孫たちの相手をしているのだが、昔の日記帳を読み返すと、同じような日々を送っていたのだなと改めて思う。

子どもたちが次々に家を出、義母を送って夫婦二人の生活になると、心を掛ける対象がすぼすぼと抜けていき、空いた穴をどうやって埋めようか考えるようになってきた。ところが、何かをしようと思つても、なかなか腰が上がらないし、始めたとしても続かない。気が付けば、走ることもできなくなり、段差を越えようにも脚が上がらない。これまで平気で待ちあげていた物が動かかせない。視界を蚊のような黒い点が飛び交い、眼鏡なしじゃ本も読めない。雨音が聞こえず、人の話の半分ほどしか聞き取れない。五感はやがて元より気力も体力も落ちてしまい、できることの範囲が随分狭まってしまう。追いつけなかったのは車庫での事故。「老い」という大きな垂れ幕が目のかざされた感じだ。この「老い」は、どこから始まっていたのだろうか。「おいおい」にやられて来た「老い」。夕焼け通信の歴史をたどりながら、今日に至る自身の「老い」の過程をたどつていこうと思う。

30代フリーター アベノミクスで長期にわたって金融緩和を続けたのに、デフレから脱却できず、景気もたいしてよくならなかった。ところが、コロナとウクライナ戦争でインフレになると、逆に米欧では金利を上げて物価の高騰を抑えられなくなった。金融政策はかつてのような物価や投資をコントロールする力を失い、せいぜい為替相場を左右するくらいしかできなくなったのではないかと。

そんな趣旨のことを永江一石というWeb系マーケティングコンサルタントがXに書いていた。そこから、景気を左右する力は国の政策よりも国民のマインドのほうが大きいという結論を導いている。

年金生活者 現在の資本主義がモノの動きだけでなくココロの動きに大きく左右される「マインド資本主義」とも呼ぶべき段階に達したこと、かつてのようなマルクス主義的な唯物論だけでは経済の変動を説明できなくなり、唯心論的な理解が必要になったことを意

は、所得が右肩上がりだった高度経済成長の時代にくらべても、はるかに安全、快適になっていく。安い衣食が飢えと寒さの防波堤になり、スマホが次々と娯楽や社交の機会を提供している。つまり貧乏でも、以前にくらべればずっと便利で心地よい暮らしができる。

その姿は交換様式論からは見えない。交換の両端にある生産と消費の過程が捨象されるからだ。その結果、現在の社会でどんなモノやサービスが生産され、それがどのように消費されているかが見えにくくなる。別の言い方をすれば、交換価値だけに光が当てられ、使用価値は陰に置かれる。

格差と貧困の拡大とは交換価値の偏りのことだ。先進諸国で大多数のひとが手にする交換価値の取り分の割合は確かに減った。だが、使用価値は逆に増えている。富の稀少性の縮減がそれだけ進んでいるということだ。交換価値が増殖していた高度経済成長時代には、今のようなファストフード店も

味する。

景気がマインドに左右されるようになったという意味は、GDPの50%超を占める個人消費が買い手の気分によって左右される度合いが大きくなったということだ。消費支出に占める選択的消費の割合が必需的消費のそれと肩を並べるまでに増え、消費の半分は個人の心持ちによって決まるようになった。資本主義が富の稀少性の縮減を加速した結果にはほかならない。

金融政策、すなわち金利の操作は、カネの値段をコントロールすること、そのカネと結びついたモノやサービスの値段をコントロールすることだ。だが、モノやサービスの需要が、「必要」だけでなく「選択」によって決まる度合いが大きくなり、両者が同じくらいになったため、金融政策はかつての半分くらいしか機能しなくなった。アベノミクスがデフレ脱却に効かなかったのは必然であり、モノやサービスの供給を直接止めるパンデミックや戦争によってやつとインフレになった。

ファストファッションの店も、スマホもなかった。

30代 消費者の気分によって左右される資本主義はこれから先、どこへ向かうんだろう。

年金 生存に必要な衣食住の必需的消費には限度がある。金持ちも貧乏人も、着て食べて住むという消費行動の基本は同じであり、違いは高級品を使うかどうかといったような程度の差し

30代 ゼロ金利政策だけでなく、財政政策もデフレ脱却には効果がなかった。

年金 金融政策の場合と理由は同じだ。ところが、各国ではいまバラマキ政策が目立つ。景気刺激にあまり役に立たないのに、それをするのは、国民の人気取りと企業へのサービスが狙いだろう。

つくる端からモノやサービスが売れた高度経済成長の時代が去った今、補助金のバラマキは企業にとつてありがたい。アベノミクスでバラまかれた補助金は企業にイノベーションをサボらせ、多くのゾンビ企業を生んだと指摘されている。

30代 先週、ジイさんが資本主義のあとずさりを説明するのに使っていた柄谷行人の交換様式論からは、景気や物価を左右する消費者のマインドは見えてこない。

年金 格差や貧困が広がったとは言っても、飢えて路頭に迷ったり、寒さで行き倒れになったりする人びとが相次いでいるわけではない。国民の生活

かない。

資本主義は、そうした必需的消費の限界を埋めるために、選択的消費の新たな対象を開発し続けなければならぬ。すでに一定水準まで満たされている衣食住に何か新しいものを付加するだけでは、買う側は物足りない。今までなかったような消費対象をつくらなければならぬ。そのひとつが生産活動を消費の対象として売ることだ。

ブドウ狩りや梨狩りはその先行例だ。農作業やアクセサリー製作、和菓子作りなどを体験できるサービスも数多くある。モノのインターネットが広がり、3Dプリンターが高性能化、低価格化すれば、必需的消費の対象も自前で作れるようになり、消費と生産はいっそう接近するだろう。

未来を知ることが過去にさかのぼることだという吉本隆明の考えにしたがうなら、生産と消費が一致あるいはとても接近していた狩猟採集社会がいくたびも未来社会のモデルにされてきたことは納得できる。

ニュース日記 935
中村 礼治

マインド資本主義